

A B C D E
F G H I J
K L M N O
P Q S T
U V W X Y
Z

アール

2021

芸術学科の素顔をお見せします



赤荻李香さん（一年）
一言：自主企画の展覧会を開きたい。あと芸学には本当にいい仲間がたくさんいます。



A 1
以前から、学芸員になりたいと思っています。そのほかに、映画、音楽、本、ファッションが好きだったので、それらを一つに学べる場所はないかと考えた時に多摩美術大学の芸術学科を見つけました。恩師の先生からも「美大にはたくさん面白い人がいるよ」と背中を押されたこともあってこの学校を選びました。

A 2
授業の中で自画像を経験しましたが、いつも見ている自分の顔でさえすごく難しいことを知りました。石膏デッサンを描いている人を見ていて、集中力と心の準備が必要だなと思っていました。もう少し慣れてからチャレンジしてみたいなと思っています。

A 3
影や形など物をよく観察して何かを描くということが入り口となり、いつも見ている自分の顔が「静物化」され、それをよく眺めて、初めての感覚を得るということが石膏デッサンにおいても重要なポイントで、そもそも何かを制作するうえでとても大切になってくる。石膏デッサンはそれを初期段階で教えてくれるものだと思います。大学に入っているいろいろ経験する中で、「物を観察する」ということがいかに大切か」を考えさせられます。

A 4
まず石膏デッサンの「観察」という点に着目してみました。私は以前からヌード、つまり人の形に興味があって、その時にまったく違う物を掛け合わせるアナロジーのイメージでいくつかのヌード写真に加えて無機物の写真などを集め、コラージュなどの技法を使って肉体系などを表現できればと思っています。

A 5
まだ入学してさまざまな課題に取り組み始めたばかりではありますが、だからこそもっといろいろな人の絵を見て、自分の中で咀嚼して作品を作っていきたいと思っています。古典的なやり方をしっかり学んだ上で、現代的な表現にもいつかは移っていきたいですね。最終的には自分の身長より大きな作品を作ってみたいと思っています。

A 1
もともと高校時代から映像制作をしていました。ただ、美大に入るとはまったく考えていなくて、一般の大学で社会学などを学びながら、それは別に個人で制作しようと思っていました。ですが、一般大学では十分ではなく、自分のやりたいことと共通する点もあるかと考えて美大を選びました。芸術学科自体は、私のやっていることとカルチャー面においても間接的にも通じる部分があると思ったので選びました。

A 2
美大生になるならやはりデッサンはなければならない道なのでしようか。私は美大生なのに「絵を描かないの？」と聞かれることもよくあって、そういう経験からも、美大生と石膏デッサンがイコールでつながっている気がします。

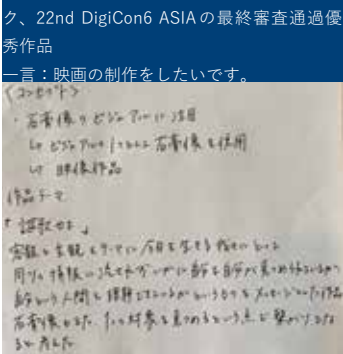
A 3
私は石膏デッサンの意義は観察がメインだと思います。石膏像は人間の形をしていて一番きれいな形で、ある意味人間らしさのない人間像である。だからこそ、その人間らしさをどう意識して描くかが、描く人によって一番異なりやすいものなのではないでしょうか。光も形も絶対に変化しないものであっても、見る人によって異なる表現になる、描き出される絵のうえでは変化が生み出れる面白い対象なのではないかと感じています。

A 4
私は映像の中で石膏像を登場させたいと考えています。実は先日自分で制作している映像の中で使用してみたのですが、そもその形がとても美しく、どこか「無」のイメージがあって、映像の中ではそれがとても映えると感じました。映像の中で何かを伝える「媒体」として取り入れたいとも思います。

A 5
私は今学業とは別に映像を作ったりしており、その部分の比率をもっと大きくしたいと思っています。同時に芸術学科に所属しているのも、芸術の中でいろいろな分野に興味を持ってさまざまなものに目を向け、自分の中に取り入れていくことをしつつ、何か大きな作品を制作していければと考えています。



徳川葉南さん（二年）
今までの活動歴» NYLON JAPAN ビデオグラフィック、装苑オンラインビデオグラフィック、22nd DigiCon6 ASIA の最終審査通過優秀作品



「芸術学科って ～「石膏デッサン」の意義を考えながら～ 実際どうなん?？」

以下の問いを四人の学生に聞いた。

Q1 あなたが芸術学科を選んだ理由を教えてください。また、なぜ美大の芸術学科でなければならなかったのですか？

Q2 美大受験の難関として「石膏デッサン」があります。それに対しての印象を教えてください。

Q3 「石膏デッサン」の意義はどこにあると考えていますか。

Q4 あなたが「石膏像」に関する作品を制作するとしたら、どのような作品にしますか。

Q5 これからどんな活動をしていきたいですか。また、大学卒業までに果たしたい夢はありますか。



岩渕夏樹さん（一年）
一言：キュレーションをしてみたいです。石膏像にまったく触れたことのない人が入学できるのも、芸術学科のよさだと思います。



A 1
私は学芸員を目指していて、他の一般私大や、いくつかの美大・芸大も受けました。そして合格したところを比べてみて、多摩美術大学が東京にあるということと多くの情報に触れられると思い、本学科を選びました。

A 2
小論文対策で美術予備校に通っていたときに周りで石膏デッサンを描いている人を見ていました。鉛筆を握ってひたすら描く様子を見ていて、いかにも美術大学を目指している学生だと感じました。美大受験を象徴する課題だと思います。

A 3
なんだろう？ リアルな人間をデッサンの対象とする場合とは違って、すべてのパーツが石膏でできていることが、石膏デッサンのある種のメリットだと感じています。それはどんなテクスチャ（質感）なのか。つまり質感表現も、描く対象物を観察するうえですごく大事。それを鍛えるためにも、石膏デッサンは重要だと思います。

A 4
私は石膏像を観察して、平面に起こすことが石膏デッサンの意義だと考え、逆にあえて石膏デッサンを見てその雛型を立体で作ってみたい。そしてその型に石膏を流し入れて立体に起こし、どれだけモデルとなった石膏像と近いかなどを比較してみると、凹凸の把握などが逆転して面白いイメージになるんじゃないかなと思います。

A 5
自分は作品制作というのは本当にスローで落書き程度のことしかしてきませんでしたが、美大なので制作してみたい気持ちもあります。芸術学科にいたので、理論も勉強した上でそれに基づいた作品を作ってみたいと思います。



A 1
ももとは美大を目指してなかったんです。一般の国立大学を目指していて、現役合格をはたせず浪人しました。映画や本が好きでしたが、美大については調べたことがなく、いざ調べてみると面白そうだなと思ってこの学科を志望しました。アートなどを制作する経験をしていくわけではありませんが、自らの心に問いかけて、ただ好きだなと感じて選びました。

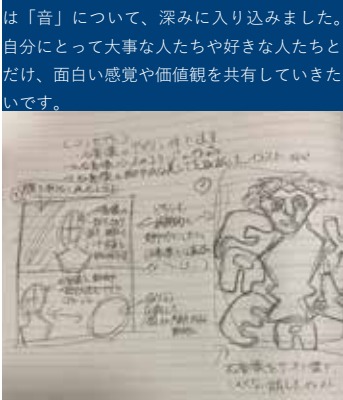
A 2
僕はまったくデッサンの経験がなくて、一年次に制作の授業で経験したときにめちゃくちゃ難しいなと思いました。講習会でも酷評されました。ヌードや風景画を描いたのですが、石膏像はさらに難しいんだらうと思います。あれだけ端正で立体的なもので、やっぱり質感が全然人と違うものをどう描くのか、まったくわかりません。ただ、無知な僕からすると石膏デッサンを通ることによって、どういう風にプラスになるのかには、すごく興味があります。

A 3
僕なりに思うのが、石膏像って形態美をすごく意識して作られた物なのだろうと思います。何かを立体で表すのに一番美しい状態の一つが石膏像なのだろうと思っているので、それを観察して描くという、美術家になる修業のために最も軸となる部分を体得するということになるのでしょうか。映像を作るにしてもなんにしても、創作は、そうした軸があって、それを自分の中に取り込んで、さらに崩していくことだと思うので、最も美しい石膏像をまず最初にデッサンすることで、その後のデッサンにも枝分かれしていくのではないかなと思います。

A 4
石膏デッサンの硬いイメージとは逆にそれを崩してイラストを描くか、コラージュを作るかの二択だと考えています。僕自身結構好きなのが、きれいに描かれたものよりも雑に描かれたイラストや、輪郭線がブレブレの絵画です。調和の崩れた部分などを意識して、自分だったら色のない石膏デッサンと比較して斬新な色づけをしたりをコラージュしたりして、グラフィックを作ってみたいですね。



尾上莉央さん（二年）
一言：グラフィックの制作をやってみたいです。服のデザインにも興味がります。最近では「音」について、深みに入り込みました。自分にとって大事な人たちが好きな人たちとだけ、面白い感覚や価値観を共有していきたいです。



学芸員って何？

とりあえず芸学においで！

「何を勉強しているの？」と言われてちな芸術学科。
何を勉強するかは学生によって千差万別。何でも勉強できるところが芸学の魅力である。
勉強したいことがある人はいくらでも深められるし、
まだ何を勉強しようか迷っている…という人にこそお誘え向きな芸学。
特に、学芸員にちよ／つとも興味がある方にはとても有意義な学科である！

皆さんは知っているだろうか。多摩美の公式ホームページに以下のような記述があることを。

「博物館に関する専門科目」は卒業単位に含まれない

学芸員資格を取るためには、「博物館に関する専門科目」を十九単位、「本学が定める科目」を十二単位履修した上で学位を取得する必要がある。十九単位も取るのに、卒業単位に含まれない!!

ご安心を。芸術学科では、「美術館に関する専門科目」が「芸術学科開設科目」として設けられている。つまり、これらの科目を履修すると「博物館に関する専門科目」履修者と同等の権利が得られる上に、獲得単位を卒業要件に組み込むことができるのである。

「ちよ／つと学芸員に興味があるけど、本格的に資格を取るかは迷うなあ…」 「そもそも学芸員が何をしているのか分からない」という学生も、気楽に授業を覗いてみる事ができる。授業を受けてみて、やっぱり違うと思ったら資格課程を抜けても大丈夫。もちろん、毎年少なからぬ芸学生が学芸員資格を取得している。学芸員として社会で活躍している者も、実際に多い。

それでは、芸学開設の「美術館に関する専門科目」にはどのような授業があるのだろうか？ この記事では、筆者が受講して面白かった授業をいくつか紹介する。



本学開講科目名(芸術学科)

●博物館に関する科目(計19単位)

生涯学習概論 R
美術館概論
美術館経営論
美術館資料論
美術館資料保存論
美術館展示論
美術館教育論
美術館情報・メディア論
博物館実習 RI
博物館実習 RII

●本学が定める科目(計12単位以上)

西洋美術史概論
日本美術史概論
東洋美術史概論
東洋彫刻史 -1,-2
文化財学
写真論 -1,-2
民俗学 -1,-2
現代美術 -1,-2
芸術材料学 I・II・III-1,-2
日本近代美術史
近・現代美術史
美学特論
キュレイトリアル論

① 美術館資料論

「美術館に関する専門科目」と聞いて、すぐに思い浮かべるのは美術館の歴史や現状を学ぶ授業。美術館資料論は、まさに美術館の基礎知識を学ぶことができる授業である。

美術館は、王族が持つコレクションを公開するためのサロンから始まった。歴史と複雑な世界情勢に翻弄されてきた美術館は、戦争と侵略の爪痕を今日に残す。美術館に保管されている略奪品の存在は、昨今の国際間の軋轢の原因にもなっている。

美術館資料論では、美術館の歴史の概略を学んだ上で、後半は美術館の抱える国際問題について大きく取り上げる。学芸員として働くつもりはなくても、一般教養として知っておきたい知識ではないだろうか。

担当教員は木下京子先生。日本美術史の研究者で、米国のフィラデルフィア美術館東洋美術部で学芸員を務めた経歴を持っている。

② 美術館教育論

美術館は「研究・展示・教育」機関として三柱の役割を担っている。展示活動や教育活動を指揮する学芸員には、作品を効果的に紹介したり、イベントを企画したりするために、クリエイティブな発想力が常に求められる。

美術館教育論はグループワークや制作が頻繁に行われる授業である。発表とディスカッションの機会が多く、実際に自分の手を動かして作品の魅せ方を学んだり、他の学生の発表を聞いて自分とは違う視点を知ることができる。クリエイティブな循環を持つ授業である。

美術館教育論では毎年、多摩美内に点在する彫刻の解説シートを作成する。解説シートの読者を設定し、彫刻をより効果的に鑑賞してもらうための紹介文、使用素材を検討する。そして、最終的には履修者全員の前で発表を行う。

担当教員は家村珠代先生。目黒区美術館で学芸員として長く活動した後にフリーのキュレーターに転じた。現代のキュレーションの可能性と、これからの美術館のあり方について研究している。

③ 美学特論

学芸員になるために美学の知識がいるの！？と思った方。美学特論は、学芸員課程の「本学が定める科目」に該当する芸術学科開講科目である。

前述の通り、学芸員資格を取るためには、「本学が定める科目」から12単位を所得する必要がある。その中には各美術史の概論や、写真論、民族論などが定められている。これらの科目に加えて、芸学生はいくつかの芸術学科開講科目をさらに「本学が定める科目」として認定することができる。

つまり、芸学生は「本学が定める科目」として選べる授業のバリエーションが豊富なのである。美学特論はこの芸術学科開講科目のうちの一つだ。

美学特論の授業では、「美学とは何か？」という基礎知識から始まり、プラトン哲学やギリシャ神話に間口を広げて「美」のあり方を探っていく。一般教養としても有用で、哲学や思想に興味がある学生は大変面白く受講することができるだろう。学芸員としての進路を視野に入れていない芸学生も多く履修している。

担当教員は川瀬智之先生。多摩美芸術学科の卒業生である。多摩美の他に東京藝術大学芸術学科でも教鞭を執っている(本誌18ページの「そこからここへ」にも関連記事)。



授業名

芸術基礎・ことば

担当教員 須山悠里

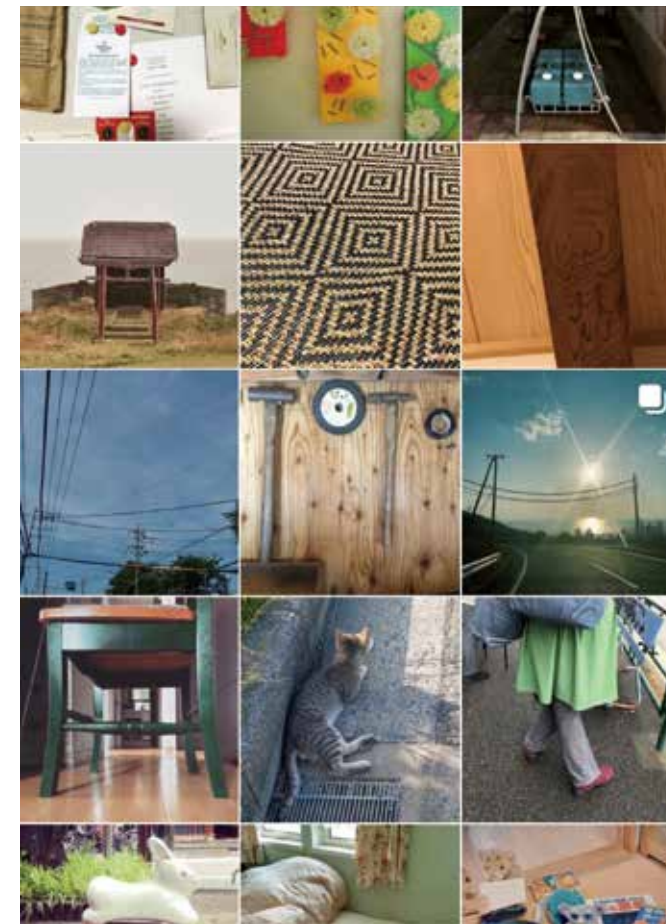
衝撃！

課題にインスタを使う授業

二〇二〇年六月五日十時四十分、ウェブサイト「Art Language program」にログイン。「芸術基礎・ことば」1 須山悠里」と書かれたサイトをクリックし、その中にある「0005 - suyama」という部分を開く。本学科の非常勤講師、須山悠里先生の講義の始まりだ。この日のテーマは「記憶」。私たちが日々触れている「文字」を「見る」ことを起点に、記憶について考えていく。

その例として、グラフィック・デザイナーである大原大次郎氏の《もしやうりよくのモビール》という作品が紹介された。「もしやうりよく」とは、「文字」と「重力」を掛け合わせた造語だという。この作品は、とある言葉を構成する文字を一つ一つの要素に分解していき、それをモビールとして再構成させたものを三次元空間に放った映像作品だ。糸で吊るされた紙製のモジュールは、定着することなく動き続ける。そして、時折モジュール同士が重なり合い、文字を形成するのだ。そのとき、鑑賞者はそこにある文字を意味のある言語として知覚する。須山先生はこの作品で文字を読むときの一連の流れに、二つの記憶が関わっていると述べる。一つは形成さ

芸術学科の一年生の必修授業「芸術基礎・ことば」。芸術学の基礎としての「ことば」と「書物」の本質について学ぶ。学生たちは、実際に作品を作りながら社会における「書物」の存在について考えていく。その作品の提示場所として、Instagramが利用された。



本授業のInstagramの画面。履修生のみが見られる設定になっている

れた単語などの言葉に対する記憶。もう一つは、「文字」という形そのものに対する記憶だ。最後に、須山先生は学生に「私たちに、像を結ばせるものは何でしょうか？」と問いかけた。これらを読み終えた後に、課題が提示され

た。身近な風景から、「文字ではないが、文字に見える形」を探し、撮影するという内容で、撮影した写真はInstagramに投稿するようにとのことだった。この授業では、課題を提出する場としてInstagramが活用されている。これは、須山先生の考えた、学生同士の

新たな交流の場を作るための手段であった。新型コロナウイルスが蔓延し、一部屋に履修学生全員が集まって授業を受けることが困難になった中、どうすれば学生同士が交流できるようになるだろうか。須山先生は考えていた。Instagram上に学生が写真を投稿することにより、他の学生が撮ったものを見合うことができる。それにより、互いの制作物に批評性をもって触れ合うという、美術大学で重要な学生同士のコミュニケーションが可能になるのだ。

須山先生は、Instagram上に学生の撮影した写真が並ぶ光景を最終的に「世界に一冊の本たちが挿された、小さな本棚」と表現した。確かに、規則的に正方形の画像が並んだ光景は、綺麗に背表紙が並ぶ本棚に近しい印象を与える。画像をタップすることで、一人の学生が作りあげた作品を見ることができ

取材・文・レイアウト＝奥谷笑子

※「芸術基礎・ことば」は2021年度からは他の教員が担当します。

芸術と社会をつなぐ

つくる
Make考える
Think伝える
Communicate

アートをことばにする。
世界に発信する。



多摩美術大学芸術学科

〒192-0394

東京都八王子市鍵水2-1723

URL: <http://www.tamabi.ac.jp>

芸術学科に関するお問い合わせ

TEL : 042-679-5627

FAX : 042-679-5649

E-mail : geigaku@tamabi.ac.jp

海老塚耕一 教授

本コラムでは、芸術学科の専任教員を紹介する。
海老塚耕一教授は現代美術家の活動を続けながら、
四十年近くの間、学生の自主性を重んじた
展示会の制作にかかり続けてきた。

原点は「学生が自主的に展示会を作る」こと

現代美術家として知られる海老塚耕一教授
が担当している構想計画設計ゼミでは、毎年
秋に「Tama Vivant II」という展示会を開いて
いる。前身の「Tama Vivant」は、今から四十
年ほど前に、芸術学科を創設した美術批評家
の東野芳明氏が始めた企画だった。

海老塚教授は当時、芸術学科で助手を務め
ていた。学科は創設されたばかりで、教員も

学生も何をすればいいのかの模索に明け暮れ
る混沌の時期だったという。しかしそこには、
熱いエネルギーがうごめいていた。

端緒となったのは、八王子キャンパスで秋
に開かれる芸術祭だった。当時の芸術学科で
は、もの派の作家として著名な李禹煥氏が専
任教員を、同じくもの派の作家で近年ヴェネ
ツィア・ビエンナーレに出展するなど活発な



「海老塚耕一展」(2021年1月、ギャラリーQ) 会場にて

活動を続けている菅木志雄氏が非常勤講師を
務めていた。芸術祭の実行委員会の中心メン
バーだった芸術学科の学生たちは二人を口説
き落とし、さらに田窪恭治、戸谷成雄、海老
塚教授の作品を加えて芸術祭特別展を実現す
る。その展示を見た東野氏はいたく感心し、
「学生に授業で展示会を制作させると、いい
刺激になるんじゃないか」と考えたという。

実際に、芸術学科の授業の中で企画展が
成立したのは四年目のことだった。若き女
性作家が頭角を現した時代だった。杉山知
子、松井智恵、吉澤美香ら七名の女性作家を
選び、「戯れる表面」展が成立する。会場
は、本学八王子キャンパスの絵画棟。「Tama
Vivant」の旗揚げだ。直後に、当時八王子市
にあった西武百貨店から「催し場でこの展覧
会をやってくれないか」と思わぬ声がかかり
実現する。学生たちのエネルギーが学外でも
実を結んだのだ。

「Tama Vivant II」は、教員生活半ばの一九九〇
年に脳梗塞で倒れ、教員生活を終えた東野氏
の意図を継ぐ形で続いていた。それゆえ、海
老塚教授は「学生が自主的に展示会を作る」
という原点を今も大切にしている。「展覧会
を企画するにはまず作家を知らないと思
えない。日頃からギャラリー巡りなどをし
て、できるだけ多くの作品を見る必要がある」
キュレーター、批評家の活動の基本を忘れた
いよう、学生たちにアドバイスする。

海老塚教授には、授業の中でもう一つ特に
大切にしていることがある。文章を書くこと
だ。「Tama Vivant II」では、毎年カタログを
制作している。学生たちは、出展作家・作品
に関する解説を苦労して執筆する。それがか
けがえない経験になるという。
文章を書くに当たっては、作家に話を聞く。
作家ゆえのアドバイスもする。

小川敦生 教授

「自身の体験を学生にも生の形で提供したい」
と小川教授は言う。記者として培ってきたものを、
いったいどのようなかたちで
学生たちにあたえているのだろうか。

術関係者からも好評とのこと。学生の雑誌制
作に積極的な姿勢に対し、編集長である小川
教授は「号を重ねるたびに学生の成長を見ら
れるのがうれしい」と笑う。

小川教授は、ゼミの初回に「皆さんには出
版社と同じ経験をしてもらいたい」と話すそ
うだ。出版社に勤め始めた頃、自分が書いた
原稿をほぼ全て書き換えられた。取材してき
た内容はそのまま、言葉遣いを変えるだけ
で見違えるほど立派な記事になったことに感
動し、それが記者人生の礎になったので、学
生にも同じ経験をしてもらえればと考えてい
るという。



ジャーナリズムや経済に関連した講義もあ
る。中でも「芸術と経済」では、美術市場の
構造や贋作などについて、ジャーナリストの
視点で考える。まるで落書きのようなサイ・
トゥオンブリーの絵画が数十億円もした理由
や、ダ・ヴィンチと経済の関係など多様な材
料を授業で提示し、学生の意見を聞きながら
授業を進める。

この授業に関連して、昨年十月下旬にイン
プレス社から著書『美術の経済』が発刊さ
れた。小川教授が自ら書き下ろした美術関連
のビジネス書だ。内容は「裨絵から見た経済」
や「美術商とは何か?」、「カネと無関係な美
術品」など様々だ。

小川教授のモットーは「現役のジャーナリ
ストであり続ける」ことだという。それゆえ
今もさまざまな媒体に記事を書き続けている。

取材・撮影・文・レイアウト＝森分麻莉紗

小川敦生 (芸術学科教授)

(おがわ・あつお) 1959年福岡県生まれ。東京
大学文学部美術学科卒。日経マグロウヒル社
(現・日経BP社)入社。週刊『日経エンタテイ
メント』誌記者としてクラシック音楽と洋楽を
担当。その後、月刊『日経アート』誌記者・編
集長を経て日本経済新聞社文化部へ。「美の美
パウル・クレー 色彩と線の交響楽」「美の美
画鬼、河鍋晩斎」「瀬戸内芸術祭 写真で巡る
『島とアート海の旅』」など多くの記事を執筆。
2012年本学芸術学科教授に。現在も、日本経済
新聞のコラム「美の粹」や音楽之友社のウェブ
マガジンONTOMOのコラム「“アートな”らく
がき帳」等の執筆を続けている。著書に『美術
の経済』。国際美術評論家連盟会員。

「現役ジャーナリストであり続ける」

ジャーナリストである小川敦生教授の授業
は、本格的な雑誌制作や芸術と経済の関係性
の分析などを目的としている。

木曜日三、四限のフィールドワーク設計ゼ
ミでは、アート誌『Whoops!』を年三回制
作している。学生が企画立案から取材、記事
作成までの通常の出版社の仕事の小川教授が
編集長として指導しながら行っていくのが大
きな特徴である。発行時期は夏の「オープン
キャンパス」、秋の「芸術祭」及び年明けだ。「雑
誌名もロゴも発行時期も、私が本学の教員に
なった二〇一二年にゼミ生が提案して決まっ
た」という。

二〇二〇年度はコロナ禍が大きく影響した。
昨年七月末に発行された夏号では、編集会議
は全てオンラインで行われた。そのため、日



フィールドワーク設計ゼミでは、アート誌『Whoops!』を年3回発行している

海老塚耕一 (芸術学科教授)

(えびづか・こういち) 1951年、横浜市生まれ。
多摩美術大学大学院修了。美術家としての制作
を、鑑賞理論としても論理化しつつ、子供との
交感を通して独自に展開。「第6回インド・トリ
エンナーレ」ゴールド・メダル、「第4回アジア
ンアート・ビエンナーレ、バンガラディシュ」
最優秀作家賞、第15回平岡田中賞、「第19回
サンパウロビエンナーレ」、「プライマル・スピ
リットー今日の造形精神」(ロサンゼルス・カ
ウンティ美術館、シカゴ現代美術館ほか北米を
巡回)、「第19回現代日本彫刻展」神奈川県立近
代美術館賞、FOCUS 2002「結界 海老塚耕一展」
(神奈川県民ギャラリー)、タカシマヤ文化賞。
文部科学大臣表彰 (2020年)。

「学生たちには、作家の言葉をそのまま信
用すると言います。作家はレトリックを
使っていることもあれば、大げらを吹いてい
る時もある。周りの思想に流されて作品とは
関係のないことをしゃべっている場合もある。
言葉を真摯に受け止めつつ、学生たちは自分
で考え、咀嚼することが大切なのです」

取材・撮影・文・レイアウト＝編集部



「Tama Vivant II」
(本学アートテーク・ギャラリー 2019年11月) 会場風景

家村珠代 教授

キュレーターとして展覧会づくりに精力を注ぐ。作家と意見を交換しながら展覧会を作っていくスタイルを、本学でも貫いている。コロナ禍の下で開いたゼミ展も、充実した内容になったという。



家村ゼミ展 2020「金氏徹平のグッドペンチレーション-360°を超えて-」
(2020年10月14～28日、多摩美術大学アートテークギャラリー) 会場風景

意見の交換がよりよい展示を生み出す

本学科で「キュレイトリアル論」や「美術館展示論」「展覧会の構成論」など美術展にかかわるさまざまな授業を開講している家村珠代教授は、キュレーターとしてこれまでに数多く展覧会を開いてきた。

取材を行った日も、家村教授が担当している展覧会設計ゼミが企画した展覧会『金氏徹平のグッドペンチレーション-360°を超えて-』が開催されていた。二〇二〇年度で本学に来て五年目になる家村教授は、「今年には特に、めざしていることを学生とともに実行に移せたい展覧会になった」と話す。毎年、ゼミで展覧会を制作するときに意識している、学生と教員、学生と作家が互いに意見を出し合いながら双方に刺激を与える交流が、今年は特にうまくできたとうれしそうに言う。新型コロナウイルスの影響によって、ほとんどの作業がZoomを通じて行わなければならないってしまった中で、ゼミ生たちは積極的に動き、意見の交換も活発だったの



だ。さらに、この展覧会はコロナ禍の困難の下にあって、例年と異なっており芸術学科生だけでなく、油絵や彫刻を専攻する実技の学科の学生、さらにはゼミの卒業生などたくさんの人が協力してくれたという。いつもより大変な状況だったからこそ、現場には人と活気があふれていたのかもしれない。

展覧会づくりににおいて、作家とのつながりを重要視する考え方は、以前学芸員を務めていた目黒区美術館での経験に基づいている。同館に勤務した当初は、過去の文献を参考にしながら作家の履歴や美術の流れを再構成するようなテーマ展示を手掛けていた。ある時、長く美術の世界を見てきた同館の館長から「僕が生きてきた時代を本当に反映した展覧会とは違う」という言葉をもらい、ショックを受けたそう。そして、残っている文献を頼りに作りあげていく展覧会のあり方にジレンマを感じ、同時代の作家と共に作りあげていく展覧会を行うようになった。

取材・文・撮影・レイアウト＝奥谷笑子

家村珠代 (芸術学科教授)

(いえむら・たまよ) 1960年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科芸術学専攻博士課程満期修了。インディペンデント・キュレーター。多摩美術大学美術学部芸術学科教授。1991年～2006年の間、目黒区美術館の学芸員を務める。手掛けた主な展覧会は、『1953年ライトアップ——新しい戦後美術像が見えてきた』展(1996年、目黒区美術館)、『小林孝亘展——終わらない夏』展(2004年、目黒区美術館)、『家村珠代連続企画“ひとり”Vol.1. 袴田京太郎』展(2005年、GALLERY MAKI)、『村田朋泰展 俺の路・東京モンタージュ』展(2006年、目黒区美術館)、『家村珠代連続企画“ひとり”Vol.2. 牛島達治——ぬけてゆくこと』展(2006年、GALLERY MAKI)、『丸山直文展——後ろの正面』展(2008年、目黒区美術館)など多数にのぼる。

金子遊 准教授

自分の知識を伝えるだけが教育ではない。多くの映画関係者から、そして学生からも多くのことを学ぶ。窓の外を眺めるのも大切なことである。

コロナ禍の今だからこそ窓の外を眺める

二〇二〇年度は新型コロナウイルスの影響により、本学では多くの講義系の授業がオンラインで行われた。そして、この記事の取材もオンラインでの実施になった。映画・映像批評の分野で著名な金子遊准教授がZoomの部屋に入室する。教授と一対一で話すことの緊張感と新鮮さは、オンラインであっても同じだった。

金子遊教授はいつも画面の背景に様々な画像を置いている。どれも、実際に自身が訪れた場所で撮った写真だ。そこには、「このような状況のもとでは、学生には窓の外だけでも違う世界を眺めてほしい」との思いもあるという。そうした異例の事態となっている今は、大きな時代の分岐点でもある。一九年度の映像文化設計ゼミでは、ゼミ旅行で池間島など様々な場所に赴き、多くのイベントも行った。しかし二〇年度は人と直接触れ合うことが制限され、旅やリアル会場でのイベントは見合わせざるをえなくなった。その中で、どんなことができるのか。金子遊教授は思案した。

映像文化に関して教鞭を執る金子遊教授の授業については、その中でも映画の上映会や映画関係者をゲストに招いての講義などを模索している。コロナ禍においては、さまざまなものの・ことの価値観が見直された。教育も



映画『森のムラブリ』より

その一つである。「自分の知識を伝えるだけが教育ではない。この状況下でいろいろな人を招き自分の知らない世界について話してもらうにはどうすればいいか」「授業を通して学生たちにはむしろ多くのことを教えられるべきことに思いついた。教員というのは得な職業だ(笑)」

オンライン授業でもゲスト講師を呼ぶことや映像を見せることは可能だ。東京国際映画祭シア・プログラマーの矢田部吉彦さんなどをゲストで呼び、対談形式の特別講義を持つてもらった。学生からはオンラインのチャット画面などでたくさん意見や感想をもらい、大きな手応えを感じた。

ドキュメンタリー映画監督としても活動している金子遊教授は、一九年に『森のムラブリ』という映像作品を完成、公開した。撮影の際にはラオスの山奥に足を踏み入れ、会えるかどうかさえわからない狩猟採集民族を追いかけたそう。『今までの撮影の中で最も過酷だった』という。途中では、飲み水までなくなってしまったこともあったという。

その経験は、『森のムラブリ』の映像の随所にじみ出ており、鑑賞すると、まるでそこにいるかのような臨場感を得られた。コロナ禍においても、目には見えないウイルスの恐ろしさをテレビなどを通じてたくさん人の映像によって感じた。映像は虚構を本当に存在するかのように伝えることもできる。普通の人は簡単に見ることのできない世界を見せることも可能だ。一方で、スマホ等の普及によって、ちまたにはたくさん人の映像があふれ

金子遊 (芸術学科准教授)

(かねこ・ゆう) 1974年埼玉県生まれ。2019年度より本学科准教授。映像作家・放送作家を経て、現在は映像、文学、フォークフロアを領域横断的に研究する。専門はアートフィルム、ドキュメンタリー、ワールドシネマ。評論『孤高の鳥々 ソフォークとネフスキー』で三田文学新人賞(評論部門)、『映像の境域』でサントリー学芸賞(芸術・文学部門)を受賞。映画雑誌の編集委員、映画祭ディレクターも務めており、2018年より東京ドキュメンタリー映画祭プログラム・ディレクターに就任。



ドキュメンタリー映画の撮影で訪れたベナン共和国にて。一番右が金子遊准教授

金沢百枝 教授

西洋中世のロマネスク美術を専門に研究生生活を続けている。理系に進んだ大学時代に病気をしたことから研究者の道を目指し、子どもの頃から好きだった美術の世界に戻ってきた。

生物学から美術史へ

昨年四月から本学科で教鞭を執り始めた金沢百枝教授は、西洋中世の美術史、特にロマネスク美術を専門にしスペインのジローナ大聖堂や南イタリアのオトラント大聖堂の床モザイクなどを主な研究対象としてきた。本学科では度重なる実地調査を踏まえた豊富な経験をもとに、「東西デザイン史」や「ユーロIIアジア美術文明論」「装飾デザイン調査設計」などの授業を担当している。

可能な限り、現地調査に行くことをモットーにしている。修士論文、博士論文を書く際にはバルセロナから列車で一時間ほどのロマネスク聖堂の図書館やジローナ大学に通った。ここ十五年間のうち、毎年二、三度調査旅行を行っている。イギリス、フランス、イタリア、スペインのほか、スイスやノルウェーなどヨーロッパ各地に足繫く通っている。「まだ旅の途中ですが、ある程度考えを纏めるつもりで『ロマネスク美術革命』という本を出しました」。

金沢先生はロンドンで暮らした中学・高校時代から絵を描くのが好きだったそうで、なかでもとくに銅版画に興味をもっていた。その中でも特にエッチングが好きだった。そしてロンドンでは、博物館や美術館に毎週末通っていたそうだ。そして、美術の道に進むつもりで現地のアートカレッジに入るための勉強を進めていた。しかし両親が仕事の事情で日本に帰国するかもしれず、一人イギリスに残って美術の勉強を続けるか、日本に帰るかを悩むことになる。そして母親の心配により、日本への帰国を選択した。「この決断がなければ私の人生が変わっていたと思います」と金沢教授は言う。

ロンドンでは、動植物学者のデイビッド・アッテンボローがプレゼンターを務める「The Living Planet」というドキュメンタリー番組が好きで見ていた。当時は熱帯雨林の伐採の問題が世界的に広まっており、金沢教授自身もその環境問題に危機感を抱いた。高校時代のお小遣いをW F Fに寄付するほど心配していたそうだ。自然や環境問題への思いが高じて、生物学や生態学を専門的に学びたいと考えた。

そして帰国後、東京大学生物学科に進学。将来はNHKに入ってネイチャーもののドキュメンタリーを撮りたいと夢をさらに膨らませていた。しかし大学三年生の時に膠原病を患い、三か月間入院する。病気の身でアマゾンの奥地やサヴァンナに行けるのか。周りの人々に迷惑がかかるかとも思い、一般の就職を断念。そして研究ならば人に迷惑をかけずに自分の好きなことができると考え、大学の研究室に残る道を選んだ。

研究室時代は、朝から晩まで研究に没頭していた。「理系の研究室は機材を自分で作るクリエイティブな部分や生物を培養する材料

や道具の準備を自分でするところなどが、道具や絵の具の準備を自分でする美大と近いかもしれない」と金沢教授は語る。生物学で博士号を取得した後に、研究生生活を続けるために、文系の大学院に転院、美術史でも博士号を取得した。古巣に戻ってきたといえようか。「大学時代がとても長いんですよ」と金沢教授は笑う。その長さが、充実した授業を生んでいるのだろう。

取材・撮影・文・レイアウト＝上嶋純奈

金沢百枝

（芸術学科教授）

（かなざわ・ももえ）1968年東京都生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。美術史家。主にロマネスク美術を研究。2020年より多摩美術大学美術学部芸術学科教授。著書に『ロマネスクの宇宙 シローナの〈天地創造の刺繍布〉を読む』（東京大学出版会）、『ロマネスク美術革命』（新潮社）、『イタリア古寺巡礼』シリーズ（新潮社）。

安藤礼二 教授

「民俗芸術論」「文学」「アジア思想史」等の授業を開講している。なぜ安藤教授は美術大学で思想を説いているのだろうか。そんな疑問を胸に、筆者は安藤教授の研究室を訪れた。

思想と芸術の根源を探究する「創造的な研究者」

安藤礼二教授にとって、祭祀は幼い頃から身近な存在であった。十代のうちに数々の書物に触れた結果、東洋哲学に対する関心が固まった。大学では考古学を専攻することを選んだ。遠く離れた場所から「今」を俯瞰したいと考えたからだ。抽象的な言葉ではなく、確実なモノを通して日本の根源を見直したかった。表現が「発生」する最前線に関わりたいと考え、大学卒業後は出版社に就職した。表現活動の至近に身を置いていると、思想と芸術は表裏一体であるという予感が確信に変わった。

代表的な著書『神々の闘争——折口信夫論』の執筆には三十五歳で取り掛かった。執筆の最大のきっかけは、二〇〇一年に発生したア

メリカ同時多発テロである。この事件によって、宗教の創造性の裏に存在する危険性が浮き彫りになった。そして、安藤教授自身の内にも潜む両者を明らかにしたいという思いに駆られたのである。同年、同書の冒頭原稿を文芸誌『群像』に応募した。この原稿が評論部門優秀作を受賞し、安藤教授の文芸評論家としての活動が始まった。賞を受けたことも嬉しかったが、「これから自由に研究を深めていける」ということが何より嬉しかったという。「僕にとって文章表現は、書かされるような感覚。無意識的に働きかけられている感じがする」と話す。



安藤教授は二〇〇六年から本学科で教鞭をとっている。中沢新一氏が本学科に就任する際に、安藤教授にも声をかけたことがきっかけだ。中沢氏は芸術人類学研究所の初代所長を務めた宗教史学者である。安藤教授に大学の教員になるつもりはなかったが、就任先が奇しくも芸術を追究する場であったため、本学に身を置くことに決めた。他の大学に誘われていたら、話を引き受けなかったかもしれないという。「縁は大事だ。興味があることを突き詰めていくと、思いもよらぬところで形になる」と笑う。美大生に対しては「感性が抜群にいいのだから、論理の力をもっと磨いてほしい」と話す。一生懸命本を読んで、人とたくさん話すことが大事だと語調を強めた。昨今のウイルス禍について、安藤教授はコミュニケーションの転換点であると捉えている。人々の移動が制限されることによって、資本主義社会が根底から崩壊した。全世界を巻き込むような危機は先の世界大戦ぶり、いや、人類史上初ではないだろうか。誰もがウイルスに感染するという点で人類は平等になった、と安藤教授は分析する。学生たちには、この期間を客観的思考の訓練期間として捉えてほしいと伝える。こんな時にこそさまざまな本を読んで、自分たちが陥っている危機について理解してほしい。これまで生み出せなかった表現が生じてくるだろう、と将来を前向きに見据える。

今回の取材を通して、巧みな言葉選びから安藤教授の知性と研究の重みが伝わってきた。筆者が研究室を訪れた際、まず目に入ったのはたくさん本だった。積まれた本の一つ一つが、膨大な知識や人物との出会いの象徴であるように思われる。

取材・文・写真・レイアウト＝里石真留美

安藤礼二

（芸術学科准教授）

（あんどう・れいじ）1967年、東京生まれ。文芸評論家。大学時代の専攻は考古学。2002年、『神々の闘争——折口信夫論』で群像新人文賞評論部門優秀作を受賞。日本近代思想史、民俗学などをベースに評論活動を始める。『神々の闘争 折口信夫論』で05年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。14年に刊行した『折口信夫』が翌年、第13回角川財団学芸賞と第37回サントリー学芸賞を受賞。その他に著書として『大拙』『列島祝祭論』『迷宮と宇宙』など、編著書として『初稿・死者の書』、編集協力書として『西田幾多郎』『鈴木大拙』『空海』など多数。『言語と呪術』には監修、翻訳、解説で参加。



金沢教授の著書『ロマネスク美術革命』『イタリア古寺巡礼』『ロマネスクの宇宙』

平出隆 教授

自ら「本」そのものを作る平出隆教授。
教員最後の年度はゼミ生一人ひとりに本格的な「本」を求めた。
そして最終講義は展覧会という形で実を結んだ。

ウェブサイトで「Air Language」の授業

「中学の時に、自分で本を作ることに目覚めた」こう話しながら取り出して見せてくれたのは、中学二年生の時に初めて自分で作ったという一冊の本だった。少年時代の平出隆教授が自ら執筆、編集、造本した『除夜』は、小さな本でありながら、表紙の材質から中の文字までこだわり抜いて作られたものであることが一目でわかる作品だ。詩人・作家・批評家として名高い平出教授は、文を読み書きするだけでなく、自ら「本」そのものを作る人でもある。「詩を書くだけでなく、編集と造本を一体に」ということばは、教授がこれまでいかにして「ことば」と向き合ってきた

のかを物語っている。

平出教授の「ことば」への意識が最も如実に現れている授業はやはり「書物設計ゼミ」の活動だろう。例年、ゼミでは『10の図書館』と題する本を作ってきた。二〇二〇年度は平出教授の多摩美最後の年である。ゼミでもそれに合わせて『10の図書館』総集編を制作している。そしてなんとと言ってもこの年度のゼミ一番の目玉は、一人一冊のBook Artの制作だった。例年は速成の小品が制作されていた。教員最後の年度は、ゼミ生の作品を平出教授の退職記念展「平出隆 最終講義Ⅱ展」に展示することになり、ゼミ活動のほとんどが個人による「Book Art」の制作に費やされた。「本を作る」というプロセスを全部学んで、経験して欲しい。平出教授のそんな思いを受けて、作品を制作し、展示へと向かう緊張感の中、一人一人が充実した結果を得られたのではないだろうか。

コロナ禍に見舞われた二〇二〇年度、平出教授はこれを逆手にとったような工夫あふれる授業を行った。その名も「Air Language program」。自身の研究活動が集積されたウェブサイトだ。同年度、教鞭を執った授業は全てこのサイトを通して行われた。Noteのようなビデオ会議システムを使わないところが、極めてユニークだ。サイト内にテキストや画像を

投稿するのだが、別のページへの誘導も設置しており、サイト内をあちこち移動しながら「Air Language program」の中へ入り込んでいくことができる。授業内容は二〇二〇年三月刊行の『芸術人類学講義』（ちくま新書）に沿っており、授業を通して一冊の学習が完成するようになっていく。

ところで、「Air Language」とは平出教授の造語で、二つの意味を持つ。一つは「なんちゃって言語」。作者から読者に空を飛んで届くような「地上の本ではなく空中の本を」目指し、もはや言語なのかどうかもわからない、鳥や雲や風の言語である。それが「なんちゃって言語」であり、「Air Language」なのだ。

「実は駄洒落なんだよね」と笑いながら話すもう一つの意味は、「エランゲン・プログラム」をモジったというもの。ドイツの大学で弱冠二十三歳にして教授職に就いた数学者フェリックス・クラインが着任時に行った、その後の数学界の新しい指針を示した画期的な講演の文章だ。数学少年だった平出教授はこれに強く憧れたという。そして、二十三歳に対して七十歳、就任に対して退任。正反対の記念に、「エランゲン・プログラム」を意識した名前をつけたのだ。

取材・撮影・文・レイアウト 村尾青空



一、二年生の授業で基礎作りを手伝う

コロナ禍という異常な状況下で二〇二〇年度の講義系授業の多くがオンラインで実施された中、大島徹也准教授のインタビューは本学八王子キャンパス芸術学棟の研究室で行われた。対面では話のスピード、声のよさをより心地よく感じ、記者の質問を細やかに聞き丁寧に答える誠実な姿勢が、授業を受ける学生に安心感をもたらすことがよくわかった。大島先生が担当している「美術史設計」「美術館概論」「近・現代美術史」などの科目は、美術史研究者や美術館の学芸員を目指す学生にとって重要な授業だ。いったいどんな方針で教えているのだろうか。

「一、二年生の授業では、七割を、オーディオ・テクスなことを教えるよう心がけています」

美術が好きで美大に入学した学生は好きな画家などに関心してはいる程度で知識を持っていたとしても、必ずしも美術史という学問を理解しているとはかぎらない。そもそも学問は先達の研究の上に成り立っているものだ。たとえば私たちは様々な評論や本を読み作品の有り様や作者の表現を理解する。その中で、その評論家が多岐にわたる学部の授業で変則的に美術に触れる人が多い学部生の授業で変則的に

大島徹也 准教授

ニューヨークに渡って八年間を過ごし、ジャクソン・ポロックの研究で博士号を取得した。その豊かな経験によって授業の厚みは増し、ここでしか触れることのできない生の講義で魅せる。

な解釈を知識としていきなり取り込む事はあまりよくないと考えている。大島先生はそれゆえ、「決して奇抜なこと、つまり自分のみの思想や見方や変則的な批評を中心とした授業にはしていない」という。「いざ自分で研究するときにオリジナリティーが出せるように、最初は基礎を作る手伝いをする」ことを大切にしているのである。

大島先生は、八年間ニューヨークに留学し、二十世紀米国の抽象表現主義の画家、ジャクソン・ポロックに関する研究で博士号を取得した履歴を持つ。戦後の米国は、世界における現代美術の中心地だ。「ニューヨークでは、趣味のように美術館やギャラリー巡りに興じていました」といった話が授業中に出てくるのも、そのときの経験があったこと。アリゾナ州で車を借りて、一週間ネイティヴアメリカンの遺跡を巡ったこともあるという。内容にリアリティーがあり、決して教科書では知ることのできない話を聞くのを、学生たちも楽しみにしている。

その後、愛知県美術館の学芸員として勤めていた経験も、授業の内容を豊かにしている。学芸員は、常に作品と向き合うことができる。



大島先生の共著書3冊。『生誕100年ジャクソン・ポロック展』図録、『ピカソ天才の秘密展』図録、『Ils ont regardé Matisse: Une réception abstraite, États-Unis / Europe, 1948-1968』

企画展の担当になると、内容を練り、作品を借りるために所蔵者と接し、展示室では実際にどうすれば来場客によく鑑賞してもらえるかなどの工夫をする。そのような多様な経験が、授業を充実したものになっているのだ。授業が専門的な内容に立ち入る時などは、学生が置いていかれないよう、アメリカ留学時代に見た展覧会の話や最近訪れた画廊や美術館の話などのエピソードを間にはさみながら、特にわかりやすく丁寧に話をしてくれる。

大島徹也 (芸術学科准教授)

(おおしま・てつや) 1973年愛知県生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。東京大学大学院修士課程修了。ニューヨーク市立大学グラデュエートセンター博士課程修了。博士(美術史)。愛知県美術館主任学芸員、広島大学大学院准教授を経て現職。主な共著に『Ils ont regardé Matisse』(2009)。主な展覧会企画／監修に「生誕100年ジャクソン・ポロック展」(愛知県美術館・東京国立近代美術館、2011～12年)、「パーネット・ニューマン」展(MIHO MUSEUM、2015年)。第11回鹿島美術財団賞、第7回西洋美術振興財団賞・学術賞受賞。

コロナ禍の下では、「学生の顔を見ながら授業ができないためよくも悪くもスムーズに授業が行われたことを「反省」した」という。オンラインでも通常の授業と変わりなく講義を進めることができた一方で、教員がしゃべったことを学生たちが本当に理解し、より深く考えてくれているかがわかりにくい。気配りの必要を感じたのである。オンラインゆえ講義は自宅からでも可能だったが、回線事故が起きないようにキャンパス内でLANケーブルにパソコンを直接つないで臨んだのも、対策の一つだった。インタビューを通して、大島先生の授業から感じていた心地よさは偶然のものではなく学生と誠実に向き合ってくれているからだと感じた。最後に、こんな言葉をもらった。

「若い感性があるうちに優れた芸術作品の『本物』に触れていただきたい。若い間にしか得られない感動がある。遠くの展覧会を見に行くにはお金がかかるが、お金は後で稼げばいい。しかし若い感性はそううちに失なわれてしまいます。将来、あのときに本物を見ておけばよかったと後悔しないために、ぜひ今のうちから美術館や画廊に足を運んで、『本物』に触れてください」

取材・文・レイアウト・撮影 赤荻李香

研究室の助手って

芸術学科における学生と教授の橋渡し役ともいえる研究室。
そこで働く助手や副手は、いったいどんな仕事をしているのだろう。

芸術学棟三階の入り口の近くにある芸術学科研究室。カウンター越しに助手と副手の姿を見るだけで、学生たちは不思議な安心感を持つ。助手・副手は、授業の準備や学生への連絡などの業務、課題の取りまとめ、授業で使う機器の整備や管理から予算作成までさまざまな場面で学生と教員をサポートする、学科にとって欠かせない存在だ。芸術学科では現在四人が勤務している。

授業が始まる直前、助手たちは研究室と教室の間を忙しく動き回る。講義系の授業では教員が使用するパソコンの接続や教室設備の確認をしたり、配布物のチェックをしたり。もともと二〇二〇年度はコロナ禍のためにオンライン授業が多く、新しい手法に慣れない教員たちのフォローに奔走した。「画像がうまく映らないんだけど…」といって戸惑う教員たちの声にも即座に応えられるだけのスキルを持っている。

一方、学生たちにとっては、遠い存在に感じることもある教授陣と比べると、助手たちは年齢も近く、身近な存在だ。履修登録の期間、ゼミ室の鍵の借用、レポートの提出時などさまざまな場面で接する機会がある。学科のゼミ等が企画する展覧会では、経験を生かして展示補助を行うこともあるし、絵画や版画、彫刻制作を行う「芸術基礎・制作」の授業では、専門的な道具の使い方の指導などで学生をサポートする。

また、コロナ禍の下では、バーテーションの設置や消毒環境の整備など、新型コロナウイルス感染症防止対策の最前線に立った。「助手」とはいうけれども、ただ教員にいわれたことをやったり学生を助けたりするだけではない。大学を理想的な場所にするためにさまざまな方策を自ら考え、提案し、実践する。学科にとって極めて重要な役割を担っているのである。

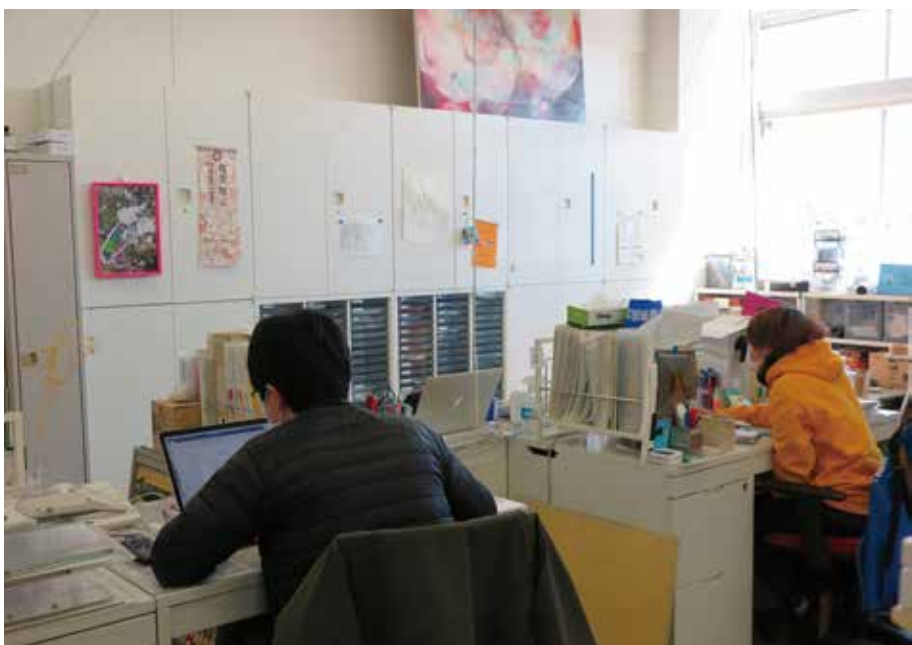
助手・副手といってもその姿は様ではなく、小説の執筆や絵画の制作、あるいは研究活動を行なう姿も見られる。その活動領域はさまざま。多くの芸術分野に触れる機会を有するのが芸術学科であるとすれば、そのあり方は、緑の下を支える存在である助手たちの姿からも伺い知ることができた。四人四様の方向を向いているからこそ成り立つ後ろ楯としての頼もしさに、学生たちは日々救われている。

副手の島田浩子さんによると、「研究室では多くの場合副手として採用され、一定年数実績を積むと昇格し、助手になります」という。また仕事内容としては前述した学生対応と授業対応のほかに専任教員会議の準備やオープンキャンパスなどのイベントの準備、各種広報物の作成、他にも入試に関わる事務的な業務などがある。

島田さんも芸術学科の学生・院生だった。学部では展覧会設計ゼミに所属して実践的に展覧会の企画・運営について学び、大学院では美術家フランス・アリスについて研究した。現在も美術に関する資料を集め、研究を続けているという。助手や副手が学生と同じように学び続けていることを知ると、身が引き締まる思いがするのと同時に、自分たちのやる気も湧いてきた。

どんな仕事？

取材・文〓荒木凜太郎



川瀬智之 さん

学生時代に「美学」に目覚める

本学科十期生として当時の「スタディ系」コースで現代美術を学ぶ中で、「美学」に目覚めた。鑑賞者の感動のありようは、時代によって大きく変化し続ける。コロナ禍の下では、美術作品を見る側も作る側も意識が変わっていくと推測する

二〇二〇年は新型コロナウイルスの影響が著しく大学の講義などの多くがオンラインで実施になる中で、この取材もリモートで行われた。そしてリモートであるにも関わらず、しっかりとスーツを着ている川瀬智之さんの姿からは、何ごとにも真摯に取り組む実直さが伝わってきた。

川瀬さんは、一九八一年に創設された多摩美術大学芸術学科の十期生。現在は東京藝術大学芸術学科で准教授を務めるが、本学でも非常勤講師として教鞭を執っている。二十世紀の芸術に関する哲学的思想の研究を専門にする現在の道に進むことになったきっかけは、大学二年生の時に受講した黒川弘毅先生の授業だった。選択必修の実技の授業の中で黒川先生が言った言葉、「芸術は〈存在〉と存在者を媒介する天使だ」という言葉に衝撃を受け、芸術においても哲学が存在し、重要な役割を担っているということを学ぶ。尚、今でも川瀬さんは美学の授業のはじめにいつもこの言葉を紹介するそうだ。美術を深く理解するためには、芸術や美についての哲学、すなわち「美学」を知ることが重要であると気づいたのだ。本学科での学生生活は、

今の川瀬さんの根幹を形成する大切な時期となった。

初めは、鑑賞者が絵を見て感動する時に心の中で何が起きているのかということに関心があったが、現在は「芸術家がどういう風に世界を捉えているのか」ということを考えるようになり、芸術分野における哲学を研究している。川瀬さんは小さい頃から二十世紀イタリアの画家ジョルジョ・デ・キリコがお気に入りだった。シュルレアリスム（超現実主義）につながる、極めて不思議な空気感を持つ作品を描いた画家だ。最近はいンド出身のアニッシュ・カプーアや米国出身のビル・ヴィオラのような、「芸術と哲学と宗教を重ねて芸術作品を作り、世界を超越した何かを芸術でつかもうとしているアーティストに興味を惹かれていて」と言う。そして、小さい頃から画集や絵を見ることが好きだった川瀬さんは、今も昔も共通して、現実を超えた世界の作風をもつアーティストに深い関心を持っているという。

「美術史では、誰が何のために作品を作ったのかということなどに研究テーマがフォーカスされますが、美学は違う。そもそも、」芸



写真：岩谷秋美

術とは何か」「なぜ自分は感動するのか」ということを疑問に思う人のための学問です」言い換えれば、美学は鑑賞者にフォーカスする学問ということになる。鑑賞者の感動のありようは、時代によって大きく変化し続ける。古典絵画などの作品が生まれた時点と現在とは、作品そのものは変わっていないくても鑑賞者の受け止め方は異なっている。美学はそんな背景のうえに成り立っているのだ。今、世界の人々は歴史的な感染症になるであろう新型コロナウイルスと対峙している。コロナ以前と以降でも、美の価値観は変化している。川瀬さんは、「インターネット時代になった現代では、絵の具の物質感や大きさの感覚が鑑賞体験からは抜け落ちる」という変化があることに触れ、そのスピードがコロナ禍による外出自粛等のために急速に増していると指摘。その結果、見る側だけでなく作る



川瀬智之『メルロ＝ポンティの美学 芸術と同時性』（青弓社、2019年）

側も画像として見られることを意識した作品を制作するようになっていくのではないかと推測する。鑑賞者の行動や意識の変化が制作者の行動にも影響を及ぼすというわけだ。

人は何のために生きているのか。一つの答えとして「自身の持つ知識を後の代に伝える」ということがありうるのではないだろうか。人類はそうやってさまざまな哲学や技術を展開・継承してきたのだ。教員はいわば、そうした人間の奥底にある意識に根ざした仕事をする役回りともいえる。川瀬さんは「芸術についての考え方はそれぞれの時代の中にある」との考え方のうえに立って、授業では「いろいろな考え方を提示し、その中から学生一人ひとりがこれだと感じたものを選ぶようにする」ことを理念としているそうだ。特に美大には、それぞれの考え方に強いこだわりを持った学生が集まっている。その中でも芸術学科はとりわけ多様といえる。川瀬さんの言葉は、芸術学科の特質をも明らかにしている。

取材・文・レイアウト
Ⅱ 赤荻李香、向リサ

（かわせ・ともゆき）東京藝術大学准教授、美学研究者。1971年神奈川県に生まれる。1994年多摩美術大学美術学部芸術学科を卒業後、東京大学大学院人文社会系研究科に進学し、2008年に博士号を取得。多摩美術大学では、2007年から非常勤講師として務めている。専門は美学。著書に『メルロ＝ポンティの美学：芸術と同時性』（2019年）。

岐 卓 県 美 術 館 学 芸 員

廣江泰孝 さん

「美のありか」を探ることに終わりなどない」

廣江泰孝さんは、岐阜県美術館（岐阜市）で日本の近・現代美術の研究や保存を専門とするなど、多岐に渡る活躍をしている。「流動的な社会の中で、アーティストは時代を形成する存在として注目されている。学芸員もそこに寄り添っていかなければ」そう力強く語る廣江さんに、これまでの経験を語ってもらった。



一九九四年に芸術学科を卒業した廣江泰孝さん。在学中は、ゼミで美学の研究に没頭するかわら、本学の実技の学科の学生と交流し作家の考え方に直接触れることで興味関心の幅を広げた。ある時、教授から「授業を受けるだけでなく、自分の目で本物の作品を見に行きなさい」と言われたのをきっかけに、「時間がある時はかかさず美術館や博物館やギャラリーに足を運んだ」と振り返る。

現職の岐阜県美術館学芸員になってからは、岐阜を拠点とし、国内外を飛び回る。岐阜にゆかりのある近代の洋画家山本芳翠や熊谷守一、さらにはフランス十九世紀末の画家

ひろえ・やすたか 一九七〇年生まれ。九四年多摩美術大学美術学部芸術学科卒。同年から現職。大学時代の専攻は美学。岐阜県美術館学芸員、課長補佐兼学芸係長。専門は日本の近・現代美術（絵画）、保存。日本の洋画家、熊谷守一に関して、また戦後における書と絵画の動向、交流について主に研究する。二〇一四年に著書『守一のいる場所 熊谷守一』企画・監修で、美術館連絡協議会奨励カテゴリー論文賞・優秀論文賞（個人表彰、自主展部）受賞。

オディロン・ルドンの日本への影響について、館のコレクションを軸に研究を進めてこられたのは美術館学芸員の醍醐味と感じている。

どんなことにもアグレッシブに向き合ってきた廣江さんだが、学芸員になりたての頃は苦い経験もたくさんあったという。同館に就職一年目の真冬に、阪神・淡路大震災が起きた。地震発生直後、文部省から招集がかり、急ぎ現場に向かうことになった廣江さんを持ち受けていたのは、目を背けたくなるような悲惨な神戸の街の光景だった。あちらこちらで火の手が上がり、建物も次々に倒壊する。瓦礫をかき分けながら歩く路上には、呆然と立ちすくむ人々の姿もあった。文化財の救援要請を受けて、とある寺院に向かい、ようやく仏像を救出してきた廣江さんに叫びかけてくる人がいた。「今そこで亡くなっている人もいるのに、なんでそんなことをしていられるのか！」悲鳴にも似たその問いかけには、ただ立ち尽くすことしかできなかった。「地域の文化を守ってほしいという思いに応えたいという気持ちと、今そこにいる人すらも救え

ないんだという無力さを同時に痛感させられた。非常につらかった」と当時の複雑な心境を打ち明けてくれた。この震災の経験から、人が残したいと願う芸術文化とは何か、心の中に大きな問いが生まれた。同時に作品保存への関心と、芸術への考え方を根本的に見直す大きなきっかけにもなったという。

芸術作品は時代の息吹や動き、人々の心の深層などを表現し、多くの人々に多様な問いを時代を超えて投げかける。「美のありかを探すことに終わりなどない」そう強いまなざしで話す廣江さんは、今でも震災の時に投げかけられたあの言葉を意識しているようにも思えた。人が尊び、守り、価値を見出すさまざまな美は、一体何から生まれてくるのか。人にどんな役割を果たしているのか、意識しながら芸術に向き合い続けている。

取材・文・レイアウト＝門脇咲和
写真提供＝廣江泰孝



岐阜県美術館で行われた「明治150年展」（2018）の準備の様子



光学調査を公開展示した「ルドンライボウスル展」（2017）会場風景

芸学生 の 未来構造



児玉安那（芸術学科1年）

A1 普通大学ではない大学に入ろうと考えていたから。また、絵が描けなくても入れるという多摩美術大学の芸術学科にひかれた。

A2 『美術館展示論』：展示のことだけでなく、身近なところから新たな発見がある授業だったから。

『美術と生活』：美術と生活を結びつけることに面白さを感じたから。

『教養総合講座』：美術と生活を結びつけることに面白さを感じたから。

A3 周りの人から刺激を受けて、いろいろなことに挑戦し人生を豊かにしたいと考えている。

A4 映画やファッション、インテリアなどに興味があるのでそういったものに関わる仕事をしたいと考えている。芸術と関わり、何かを作り上げたい。

【最後に一言！】
何か楽しいことを芸術で一緒にやり遂げましょう！

芸学生が 将来したい 仕事とは？

取材・文＝赤荻李香

多摩美術大学の芸術学科（以下「芸学」）の学生たちは、将来どんな仕事をしたいと思っているのか。その答えとなる「芸学生の未来構造」を、在学生に聞いてみることにした。

加藤理子（芸術学科2年）



加藤さんは、現在、ファッション雑誌『VIVI』のアシスタントやアパレルブランドを立ち上げて意欲的に校外活動を行っている。

A1 幼稚園から高校まで規則の厳しい一貫の学校に通っていたため大学ではやりたいことをしたいと思った。ファッションに一番興味があったためその道に進もうと考えたが、ファッションと一口に言ってもデザインやインフルエンサー、マネジメント、広報など様々な分野の仕事がある。分野を限定せず自分のやりたいことを探しつつ興味関心のあることを勉強できる学校を探した時、芸学に出会った。

A2 『展覧会構成論』…アートが社会の中に存在する意味を自分なりに見出すことが面白かった。

A3 興味があるものに偏ることなく、多様な思考を養うために興味の無い授業も受講してみたい。また、多摩美には自分の好きなことを形にすることができる行動力のある人がたくさんいる。その環境にすることがとても恵まれていると感じている。刺激を受けたいし、自分も周りを刺激していきたいと思う。

A4 日本のビューティースタンドのファッション、いわゆるモデル体型の人だけが楽しむファッションではなく、個性を引き出して生かすファッションの楽しさを発信したい。美しさの固定観念に囚われてしまっている人のファッションの定義を変化させたい。

【最後に一言！】
やりたいことや好きなことがあったら、形にすると楽しいと思う。学生のうちは難しく考えなくて、やりたい事があったら行動してみたい。

将来どんな仕事をしたいか？ どんな職業に就きたいと思っているか。
この企画では、インタビューに応じてくれた3人の芸学生に以下の4つの質問をした。

- Q1 芸学に入った理由は？
- Q2 多摩美術大学に入って面白かった授業は？
- Q3 芸学で何を吸収して将来に生かしたいか？
- Q4 あなたの未来構造は？

インタビューによって、答えてくれた在学生のそれぞれが、何となくではなく、学習意欲や強い意思を携えて進学してきたことがわかった。2021年に入学してくる学生のために行った企画だが、在学生にも、改めて意識の高い学生が集う本学科に入学することができたことがとても恵まれていると感じられるのではないだろうか。これからの学生生活がとても楽しみになる結果だった。

向リサ（芸術学科1年）



向さんは、高校1年生の時にファッションショーの企画を行った。高校2年生の時には短編映画を制作し、映像制作の楽しさを知った。現在は、主に身体をテーマにした作品作りを自主的に続けている。

A1 多摩美術大学ではプレッシャーに負けず伸び伸びと活動できると思った。また、一つの事だけに集中して勉強するのではなく、さまざまなことを選んで学べるところに魅力を感じた。勉強の次に大切なもの、勉強がなくなったときに自分が何をやるべきかを分かっている人が多くいることにすごく惹かれる。

A2 『芸術基礎・ことば』…理論的で難しく避けてしまうようなところも分かりやすく話してくれる。葉書を作るのもすごく楽しかった。

『芸術学英語10』…俳句の翻訳が面白かった。全く同じものを訳しているのに一人一人の考え方によってその人の個性が出たり、言語のあり方が変わったりするということを知ることができた。

『パフォーミングアーツ史』…演劇が好きで私でもここまで深く演劇のルーツや重要人物について学んだことはなかった。新しい演劇の世界が見えたのがうれしかった。実際演劇部に入っていたけど、演じることと見ることでまた別の楽しみ方があったと知った。

A3 自分の考えをしっかりと持った人が多いので、そういった人たちと切磋琢磨して技術や感性を育みたい。

A4 映画監督になりたいと考えているが、表現者として作家としての自分でありたいし、人生一度しかないものでやりたいことをやり切りたい。全てが中途半端にならないよう、各方面の知識をたくさん学びたいと思う。

【最後に一言！】
人生は今の連続でしかない。だからこそ今を楽しめる人間になる。どんな人間でも、それができる人は美しい。



原稿に間違いがないかどうかをチェックするために印刷された校正紙。誤字脱字を入念にチェックする



パソコン上で写真を貼り付け、原稿を流し込んで記事のレイアウトをする様子。Adobeの「InDesign」というソフトを使って作成する



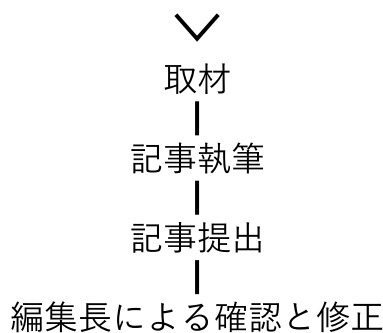
学生記者が書いた原稿の修正指導は、ワープロソフトの変更履歴を表示する機能を使って行われている。写真は、このコラムの原稿に編集長の小川敦生教授が赤字を入れたもの

印刷を委託している会社、八紘美術の印刷風景



取材の担当を決める学生たち。
取材する人物は、各学生、教員、研究室の助手たちがアイデアを出し合って決める

編集会議／企画の決定



完成原稿の作成

レイアウト 取材先による確認

校正

デザイン監修者による確認

印刷会社への入稿

色校正

納本

製本を委託している高村紙工所の製本風景。
『R』の印刷部数はおおよそ2万部。製本を終えるのに2～3日程度かかるという



芸学生が自ら取材、誌面で本学科の素顔をあらわに

納本され、積み上げられた『R』

本学芸術学科には、小川敦生教授が担当する「言語メディア計画」という授業がある。本学科発行の雑誌『R』を一から制作するのが、授業の内容だ。

『R』は、学科の素顔を学生たちが自ら明らかにしようという自己確認の媒体だ。制作は、「学科の素顔を見せるためにはどんなコラムを作ればいいか」「どの授業を取り上げたいか」などを決める編集会議から始まる。二〇一五年度の授業を受けたのは主に一、二年生。以前『R』の制作に携わったことのある四年生も参加した。学生が提案した企画案の検討をする一方で、どのゼミあるいは授業を取材したいかといった希望を取り、担当を決める。取材の手法などは新聞および雑誌の記者や編集長を経験した小川教授が事前にレクチャーする。しかしうかうかしてはいられない。たとえば取材対象の卒業生はたいてい仕事に多忙ゆえ、ゆっくり構えているとタイミングを逃すおそれがある。学生記者たちは電話やメールでアポイントを取り、授業が始まって一カ月も経たないうちに取材に走り始める。

次はいよいよ記事の執筆だ。いつどこで何をといった「5W1H」を書くことや情景描写の具体的な方法などについてのレクチャーは受けたものの、実際に筆を執るのは難しい。苦勞して書き、提出すると、『R』の編集長でもある小川教授による原稿の修正指導が行われる。以前の出版界ではプリントされた校正刷りに赤ペンで指摘が書き込まれるのが普通だったという。『R』ではパソコン上の原稿ファイルに小川教授が修正を赤字で書き込む。もともと原稿が見えなくなるくらいに真っ赤な指摘で埋まって戻ってくることもしばしばだ。修正を学生が原稿に反映し、再度提出。ゴースサインが出ると「完成原稿」として、今度はレイアウト作業に移る。

レイアウトはパソコン上で専用のソフトウェアを使って行われ、記事の完成原稿と集めた写真を組み合わせながら誌面のイメージ上に貼り付けていく。同時に取材先や関係者などに原稿の内容に間違いがないかどうかを確認してもらう。さらに校正を重ねる一方で、デザイン監修者の須山悠里さんにレイアウトのチェックをしてもらう。問題がなければ印刷会社に入稿する。最後に記事の写真等の色が間違っていないかを確認する『色校正』を行ない、ようやく印刷会社での印刷が始まる。そして納本。こうして初めて多摩美術大学芸術学科発行の雑誌『R』が完成するのだ。

本学科が発行している雑誌『R』は、二〇一四年の創刊以来、本学科を卒業した人々や八人の専任教員が担当するゼミの内容を在学生在が記者として取材、執筆し、記事にしてきた。ここでは、その『R』がどのようにして作られているかを改めてリポートした。

タマビメシ

多摩美術大学八王子キャンパスには現在、二つの食堂と一つのパン屋がある。それぞれメニューに特徴があり、その日の気分に合わせて選ぶことができる。値段も五百円以下がほとんどで、お財布にも優しい。学生はどのような昼食をとっているのか。この記事では、多摩美生の食事、題して「タマビメシ」を紹介する。

イイオ食堂

芸術学棟から一番近い食堂、イイオ食堂。対面授業時は頻繁に利用していたレクチャーホールや共通教育棟からも近く、「お昼はいつもイイオ！」という芸学生も多いのではないだろうか。イイオ食堂の大きな特徴といえば、やはりメニューにおける種類の豊富さだろう。「ラーメン」と名のつくメニューだけでもなんと九種類あり、昼休みには多くの学生が種類の受け取り口で行列を成す。そして、なんといってもイイオを代表する麺と言えば「イイオメンツー」だ。蕎麦うどんが半分ずつ楽しめるから「メンツー」、というユーモアあふれる名前は、たくさんあるメニューの中でもひときわ目を引く。さらに、二種類の麺が一度に楽しめるのにも関わらずお値段は三五〇円。大学生のお財布にも優しく、お得感溢れる一品だ。

また、学科内で取ったアンケート結果には、「海鮮丼」という回答もあった。イイオにある海鮮丼は「ネギトロ丼」。毎日食べられるわけではないが、メニューに並んだ日には早々に完売してしまうことも珍しくない超人気メニューだ。温かいご飯の上にふんだんに盛られたマグロのトロは、お昼からこんなに贅沢していいんですか？ と聞きたくするほどの満足感を与えてくれる。また、昔からイイオといえばカレーが旨い！ という定評もある。カレー・麺・海鮮、この三つを食べたければイイオ食堂に駆け込めば間違いなしだ。

イイオメンツー



駐車場

絵画棟



メニュー表

東学・パン屋・イイオ。タマビには実はこの三つ以外にもメンがあることはご存知だろうか。一つは東学食堂に隣接するコンビニ、セブンイレブン。お昼時は混み合い、少し遅れていくとお弁当の棚は空っぽ...なんてことも。特にありがたいのはその開店時間の長さで、他の食堂が閉まった後も営業しているためおやつや少し早い晩ご飯として利用することもできる。また、そのセブンイレブンの自販機がイイオ食堂の奥に設置されている。こちらはおやつや飲み物など簡単な商品がほとんどだが、芸術学棟からセブンイレブンまで歩くことを考えると、比較的近いイイオで済ませられるのは、忙しいときなどには非常にありがたい。もう一つ、共通教育棟にはパンの自販機が置かれている。隣にはカップや小さなパックの飲み物の自販機もあり、共通棟から出ずに食事を済ませることが可能だ。二限も三限も共通棟であるという場合、ここで買って教室で食べるというのも手である。

その他のメシ

さらに本記事では、学科内調査でタマビの外のメシについても聞いてみた。昼休みにちょっと足を伸ばしたり、帰りに寄ってみたい。寄せられた意見で一番タマビに近かったのは「ラニー」鍵水店。タマビの裏手にある本格インドカレー店で、大きなナンとその価格の安さが特徴的だ。また、橋本駅の近くにある「肉汁餃子 ダンダダン」のランチや「鳥貴族」に通う芸学生もいるようだ。たまにはタマビから出て、周辺のメシを堪能してみたいかがだろうか。

紙漉き工房



グラウンド

学生クラブ棟

第2工作センター

デザイン棟

TAUホール

体育館

グリーンホール

共通教育センター

アートテーク

絵画東棟

レクチャーホール

メディアセンター

情報デザイン棟

芸術学棟

東学食堂

大学構内のほぼ中央に位置するグリーンホールに東学食堂はある。席数がキャンパス内最大ということもあって、昼時には多くの学生が訪れ、午後の授業に備えて腹ごしらえをする。

食券機横のショーケースには日替わり定食や丼ものが並ぶ。カレーにも三種類のトッピングがあるなど、飽きることのない豊富なメニューが東学食堂の特徴といえよう。取材の日に食べたのは、日替わり丼だった。キムチの辛味と鶏の旨味を温玉が包みこむ。紅生姜もいいアクセントとなった、ご飯がすすむ一品だ。普通盛りでも十分のボリューム。さらに、定食や丼ものには味噌汁がついてくる。

日によっては Boulangerie Tougaku が、食堂内でパンの出張販売を行っている。昼食に迷った時は、とりあえず東学食堂を訪れれば、自分にあった食事にありつけるだろう。

工芸棟群

Boulangerie Tougaku

情報デザイン棟・芸術学棟の目の前にある弧を描いた外観が特徴的な建物。そこにこの店が入っている。「ブーランジェリー」とはフランス語で「パン屋」、「トゥガク」とはすなわち東学食堂のことで、ここはパン専門の系列店ということだ。

日替わりのパンが毎朝十時からショーケースに並ぶ。惣菜パンから菓子パンまで、ヴァリエーション豊かで学生たちを飽きさせない。さらに、すべてのパンは店で作られたもので、時間によっては焼きたてのパンが味わえる。天気の良い日には芝生やベンチに座っていただくのも、片手で食べられるパンならではの楽しみ。また、具だくさんの日替わりスープも忘れてはならない。温かいパンとスープで八王子の寒い冬も乗り越えられること間違いなし。

日替わり丼



厨房の様子



具だくさんのスープは心も体も温まる



ふっくらとした生地のチーズとトマトの惣菜パン



ガラス張りの外観が特徴的



▼コロナ禍で普段通りの講義形式ができない中、無事全工程を終えることができ、協力して頂いた方々に感謝を申し上げたい。廣江さんからは、仕事の状況や将来展望まで聞くことができた。中でも、被災経験のある学芸員という立場の中で得た「芸術の探求に終わりはない」という芯のある考え方は、私の学びの支えになっている。(門脇咲和)

▼自宅で、オンラインでもできる作業がほとんどでありながら、やはり直接顔を見て話し合うことに自分がどれだけ救われていたかを一番痛感した授業でした。本誌を通して、芸学を知ったり、新たな見方を得たり、何か心に響くことがありますように、と思います。(村尾青空)

▼様々な人たちの協力で今回の記事が出来上がったことを実感しています。自分の文章力や記事の構成力がいかに拙いかを実感するばかりでした。当然のことですが、自分だけの力では作り上げることができなかった記事だと改めて思います。(荒木凜太郎)

▼雑誌という媒体が出来上がるまでの行程にはあらゆる人間の熱量が詰まっていることを実感しました。情報というものの純度を極力保ったまま人に伝えるという役割はこれから先も必要であり続けるでしょう。その役割を、雑誌という媒体がよりユニークな形で続けられることを、『R』の編集を通して認識できました。(尾上莉央)

▼人生でこんなにパソコンと向き合うのは、初めてでした。19歳になってもできなかったり難しいと感じたりすることがまだまだあるんだと、学びの多い授業でした。またコロナの中での制作だったので、想像よりアンケートを集めることや取材など大変でしたが、記事が出来上がったことで受験生の手助けとなれたらうれしいです！！(赤荻李香)

▼コロナ禍によって取材出来る機会が少なかった。しかし、可能な限り食堂に行き、撮影し、食べ、感想をメモした。記事で紹介したのは一部だが、貴重な経験となった。(岩渕夏樹)

▼雑誌制作という言葉に惹かれて飛び込みましたが、取材や執筆校正などいろんな方の協力なしでは出来ない経験でとても新鮮でした。反省点もたくさんあるため、また来年できたら活かしていきたいと思います。(上嶋純奈)

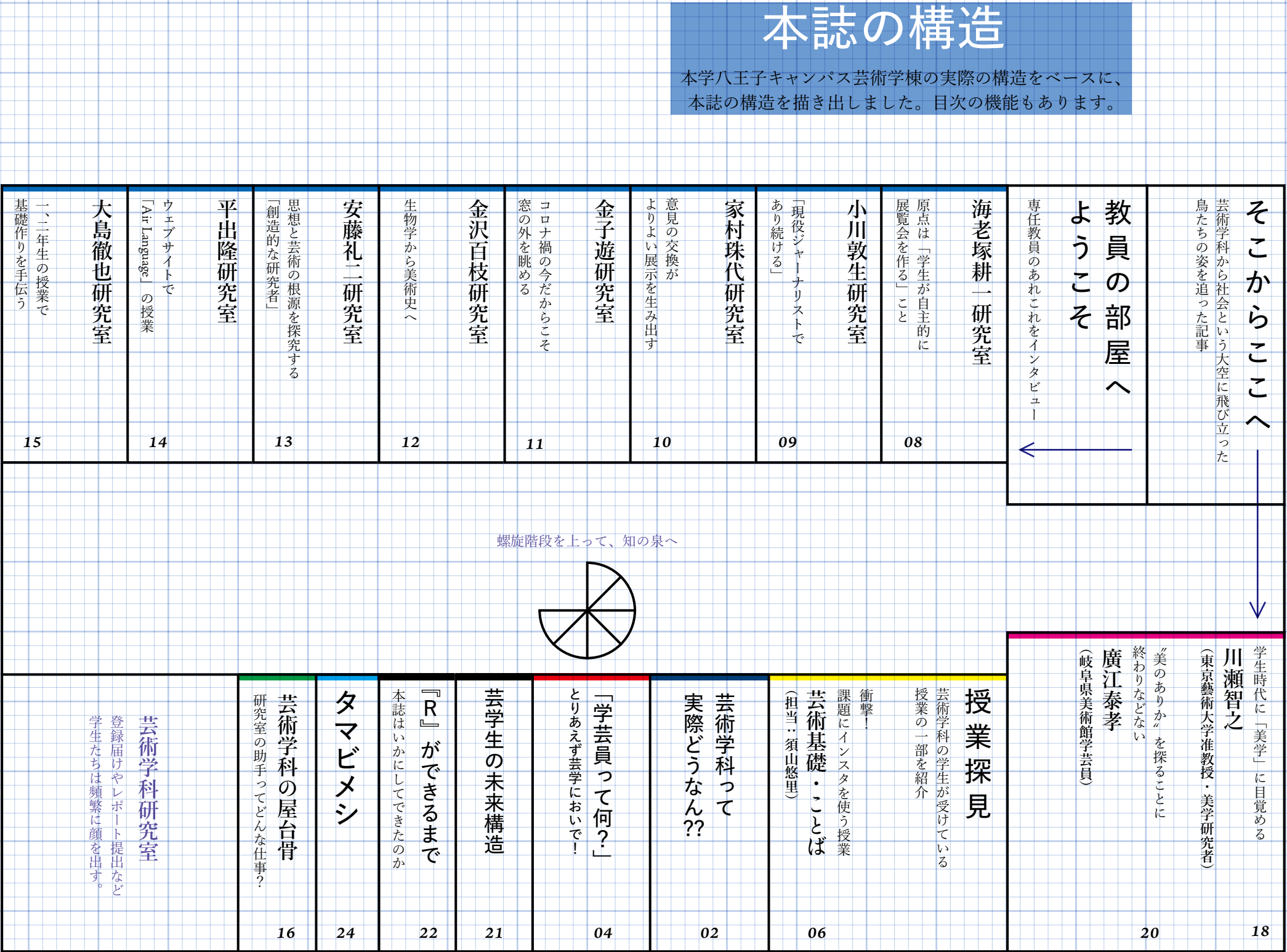
▼文章を書くのは苦手ですが、先生方や学生の方々のおかげでなんとかりました。ひと安心です。ありがとうございます。毎週記事を書いて雑誌を発行している人たちって本当に凄いなあ。芸術学科がどんな場所なのか、よく分からない人も多いと思いますが、この雑誌で少しでも興味を持ってくれればうれしいです。(奥谷笑子)

▼教授への取材を通して自分とは異なる価値観を拝聴・吸収し、執筆を通して有意にアウトプットすることができました。雑誌の編集ノウハウだけでなく、自分の将来の軸を構成するような、貴重な知識と経験を得ることができたと考えます。(里石真留美)

▼私はある映画を見て以来、雑誌の編集長になることが夢でした。雑誌の背景には多くの人がいてその数ほど物語がある、そして常に一步先の未来を届けるものです。映画やドラマで見られる編集者は、なぜかいつも美しい印象があります。私もそうなれたでしょうか。読者の方へ芸術学科の香りだけでも届くことを祈っています。(向リサ)

▼取材もパソコンを使った編集作業も初めてで、慣れない作業で苦戦することもありました。最後までやり遂げられたのは、小川教授や研究室の方々が支えてくださったおかげです。ありがとうございました。今感じている達成感と、制作過程で学んだ知識は一生大切にします。(森分麻莉紗)

▼編集部的小伙伴们、大変お疲れさまでした。コロナ禍の下での編集・制作作業は想像以上に大変でしたが、ようやく本誌発行の運びとなりました。多くの作業はオンラインで行われましたが、完成するのは手に取ることができる紙媒体です。手にとってしみじみとそのよさを味わいたいと思います。(小川敦生)



企画を立てて入学しよう！

企画力を問う「推薦入試」を実施

こんな展覧会を企画したい

こんな雑誌を発行したい

こんな映画祭を開きたい

こんなコンサートを制作したい

多摩美術大学美術学部芸術学科では、「学校推薦型選抜」を実施しています。

問われるのは、アート・プロデュースをする力です。

応募に際しては、受験生の皆さん自身が書いた「企画書」を提出してもらいます。

出願期間・合格発表等の日程の詳細は、4月以降に大学webサイト等で発表します。

出願に関する詳細については「2022年度学生募集要項」(7月中旬アップロード予定)でご確認ください。

問い合わせ先＝多摩美術大学美術学部芸術学科研究室
(電話：042-679-5627)